

教材単元と経験単元の問題(2)

中 野 和 光
(第四部教育科)

1. はじめに

筆者は、本紀要の別稿「教材単元と経験単元の問題(1)」において、キャズウエル Caswell, H. L. らが、1935年におこなった教材単元と経験単元の区別の問題を検討し、今日、この区別そのものは、単元の意味を混乱させ、実践的に無意味であるとする見解があることを指摘した。その見解は、単元の中で、教材と経験は結合されなければならないという立場に立脚する。しかしながら、このような立場に立脚しない単元は、歴史的にも、また、現在においても存在する。そのような単元構成の中で、ここでは、いわゆる生活科の単元構成を検討し、そのカリキュラム上の性格を明らかにしてみたいと思う。

歴史的には、生活科は、我国において、三度、出現したように思われる。最初は、昭和初期に、一部の尋常小学校において、二度目は、第二次世界大戦後、一部の付属小学校において、⁽²⁾三度目は、平成四年度から完全実施される今回の学習指導要領においてである。これに、養護学校で行なわれている生活科を加えれば、生活科には、4つの類型があることになる。

本稿では、この中で、昭和初期に行なわれた生活科のうち、福岡県鞍手郡直方町北尋常小学校の生活科の構成について、そのカリキュラム上の性格を検討してみたいと思う。

2. 福岡県鞍手郡直方町北尋常小学校の「生活科」について

昭和初期に行なわれた福岡県鞍手郡直方町北尋常小学校の「生活科」の構成は、二つの書物を手がかりにして知ることができる。一つは、昭和4年5月16日発行の直方北尋常小学校編『生活科教育要目』、もう一つは、同年6月16日発行の直方北尋常小学校編『特設教科として生活科』である。⁽³⁾

前者は、「生活科」の1年間の活動内容を、第1学年から第6学年まで、詳細に記述したものである。

後者は、生活科特設の理由、生活科の本質、教育方針、教材、指導法、現状の反省点等について記述したものである。

ここでは、この二冊の書物を手がかりにして、その構成について検討してみたい。

鞍手郡直方町北尋常小学校は、今日、直方市立直方北小学校として存続している。著者名からうかがわれるように、当時から、通称直方北小学校と呼ばれていたものと思われる。この意味において、本稿においても、この後は、直方北小学校の名称を用いたいと思う。

3. 生活科特設の理由と経緯

『特設教科としての生活科』によれば、生活科特設の理由は次のようなものである。

現代の教育について、次のようなことがいわれている。すなわち、1. 教師中心から児童中心に、2. 教授から学習へ、3. 他律から自律に、4. 拘束から自由に、5. 画一から個別に、である。要約して、児童尊重、個性尊重、生活重視、自由教育、生活指導といわれるところのものである。しかしながら、教育実家家の大半は、新教育を口にするのみで実施していない。⁽⁴⁾

また、今日の教育は、分科による教育である。この分科による教育も必要であるが、分科指導だけが、生活指導のすべてではない。生活そのもの、生活の実相そのものの指導が必要である。これによって、真の生活指導が行はれる。⁽⁵⁾

この真の生活指導のためには、まず時間割を撤廃し、教育の場所を全く教室外とし、自由に個別的に指導せねばならない。⁽⁶⁾

「人形遊び」「しゃぼん玉遊び」、それは決して読方の生活ではなく、修身の生活ではなく、理科の生活ではなく、又其他の教科の生活ではない。それは児童生活の真の姿であり、必要欠くべからざる彼等の生活姿態である。そうすれば、これに対する指導が不必要であると誰が言い得よう。⁽⁷⁾

この児童生活そのものの指導、児童生活の実相そのものに対する指導の必要を痛感して生れたの

が、我が校の生活科である。それは、約言すれば、児童の実生活の真姿態である、渾融生活其の者に対して指導する独立した一教科である。「渾融の生活」それは幼児程多くて生長するに従って漸次に分割の姿を示すものであるが、然し高学年児童(五・六年)といえどもより一歩高き統一の生活、綜合の生活を営むものであるから、本校に於ては、一年より六年迄等しく生活科を課している。¹⁸⁾

以上の記述からうかがわれることは、直方北小学校の生活科は、教科内容と関わらない児童生活そのものを生活指導の必要から設置した教科であるということである。また、今回の学習指導要領で実施される生活科と比して、今回の生活科は小学校の一、二年で行なわれるのに対し、直方北小学校の生活科は、一年から六年まで行なわれることも特徴的である。

生活科特設の経緯については、同書は、要約して、次のように述べている。すなわち

直方北小学校が生活科を提案したのは、同校が、大正15年に第1回創造教育連合研究会を開催した時である。そのきっかけは、大正14年、同校において、低学年の理科、地理について、二、三の有志が研究を行なったが、これらの教科指導のみでは、到底児童の真の教育はできないことを発見し、生活科特設を思い立った。このために、委員会を設置し、理論と實際を平行して進めるという研究の方法をとった。こうして、教育要目も出来、其れによって、全学年一斉に学習指導を実施する現在に至った。¹⁹⁾

この経緯を見ると、低学年の理科、地理の教科指導のみでは、児童の真の教育はできないとして生活科を設置するに至った点が、低学年の理科、社会を廃止して、生活科を設置した今回の経緯とよく似ている。

4. 生活科の本質

『特設教科としての生活科』によれば、生活科の本質は次のようなものである。

生活科の指導の対象は、分科にては取り扱うことのできない児童生活である。詳しく之を言えば、

- (1) 分科以前の生活姿態——渾一融合の生活
- (2) 生活の全体として指導するのでなければ真の姿の掴めないもの——統一綜合の生活である。²⁰⁾

生活科は、このような生活を指導することであるが、同書によれば、生活指導とは、本能的欲求を満足させるための生活を、一定の人間価値実現の方向に伸ばすことである。²¹⁾

それでは、いかなる人間価値を実現しようとしたのであろうか。

この点について同書は、次のような教育の目的原理と方法原理をにかけている。

教育の目的原理

世界人類としての立場——人格実現主義

被教育者の先験的内在力を自我の統制原理に依りて自由に伸展拡充せしめて、新価値(卓越せる人格価値と優秀なる文化価値)の創造をなさしむる。

大日本帝国国民としての立場——新日本主義萬國無比の尊厳なる國体を保有する大日本國民としての理想的人格を完成せしめ新日本文化の創造に貢献せしむ。²²⁾

教育の方法原理——人格活動主義

新価値創造の為の全我的活動にして創造的内在力顕現の活動と共に理性に統御せられたる自由意志決行の活動である。²³⁾

このように、同書は、自由な創造的な活動を推崇すると同時に、人格活動の要件と指導の方針として次のものをあげている。

人格活動の要件

1. 被教育者の創造的自制力の旺盛なる活動を尊重する
2. 被教育者の自制に統御せられたる自由意志を尊重す
3. 被教育者の生活を重視し創造活動の過程を尊重す
4. 教育存在の意義を刺激の授与と活動の誘発に歸し被教育者の自発活動を尊重す²⁴⁾

指導の方針

1. 欲求に基く真の学習動機を旺盛ならしむ
 2. 個性を尊重し、機会均等の学習をなさしむ
 3. 歓喜の努力により体験的学習をなさしむ²⁵⁾
 4. 環境の整理に努力し、自主的学習をなさしむ
- これらの方法原理を見ると、個性の尊重、体験的学習、自発的学習の尊重などは、今日の生活科と、ほぼ共通のものである。

5. 生活科教育の方針

同書は、生活科教育の目的について、次のように述べている。

生活科教育の目的「生活科は児童によりよく生活せしめる直接的力を啓発するにあり」

生活科教育の方法については、同書は、直観科や理科、合科学習、他学校の生活科と対比し、同校の生活科の教育方法との異同を明らかにすることを試みている。

直観科、理科が、思考力、想像力、観察力の涵養を目的とするのに対し、生活科は、児童の渾一統合の生活内容の指導に目的がある。⁶⁷⁾

合科学習については、同書は、福岡女子師範学校付属小学校の合科学習を例にとり、合科学習は、次の三つの重要な性質を有するとしている。

1. 総合全一の状態において教材を学習せしめること
2. 児童の生活乃至直観的事物に即して学習せしめること
3. 出来るだけ児童の自由学習個人的学習を尊重すること

合科学習は、以上のような性質を有するものであるが、要するに、それは、家庭生活から学校生活に於ける分科生活への急激なる変化を緩和すべき手段としてなほ学級教授の基礎陶冶としているものということが出来る。⁶⁸⁾

これに対して、直方北小学校の生活科は、分科によって児童生活の大部分を指導する（従来の分科指導とは大に趣を異にして分科による生活指導をなすのである）が而もなお手の届かない部分については之を生活科として指導するのであって、準備的、基礎的に意を有するものとは目的に於て大に距りがある。然し、實際指導に於ては、其規を一にするところが多い、⁶⁹⁾と同書は述べている。

他学校の生活科については、同書は、峯地光重氏の「生活科」の構想と、神奈川県川崎町田島小学校の生活科の例をあげている。

同書は、峯地光重の生活科については、次のように述べている。

「(峯地)氏は、生活科教育の目的を教科書による空疎となり易い欠陥を補うため痛切な生活観照の態度を養い以て教科書の抽象的な教材を生かす根本動力を作りたいというふうである。これを以て見れば、氏の生活科は他教科指導の基礎的準備的の教科であって低学年にのみ加設されるものである。本校の生活科は他教科の準備として存立の使命を有するものでなく、六年まで独立して指導すべき独自の使命を有するものである点において大に趣を異にしている」⁷⁰⁾

この論述を見ると、この時代すでに、生活科を低学年に設置する構想が存在していたこと、および、直方北小学校は、そのような低学年生活科の構想には反対していたことが理解される。

神奈川県川崎町田島小学校の生活科も、「特設教科」として設けられたものである。同書によれば、田島小学校の生活科は、「自然を含む文化即ち文化の素材たる自然を関係づけて見る、文化を

生活原理乃至郷土文化に立って、生活を生活せしめんとする直接的な力を得させようとする特設教科であって尋常一年から高等二年まで課すべき本質的使命を有する発展的な教科である」

「其内容に於て第一郷土文化を全文化との関連に於て統一的な体験構造として理解せしめようとするものである。第二は国民文化的の生活を主観と客観、生活と発表と了解との関連に於て把握せしめようとするのである。」

同書は、田島小学校の生活科を「郷土の自然及文化の了解といふことを目ざしているように思われる」と要約し、直方北小学校の生活科は郷土の自然文化を対象としている点同一であるが、其れ等の対象の中に生活する児童の生活を生活させるところに趣きを異にしている、と述べている。また、田島小学校の生活科は、児童将来の郷土生活の準備という色彩が可成り濃厚にあらわれているが、直方北小学校の生活科は将来の生活の準備というわけのものではない、と述べている。

6. 生活科の教材と指導方法

生活科の教材選択の範囲、選択の標準、配列の標準について、同書は、次のように述べている。生活科教育の材料選択の範囲

1. 生活の形式より眺むれば児童の生活は

個人生活		
社会生活	交友の生活	家庭生活
	大人に交わっての生活	一般社会生活

斯うした生活があるわけである。このいずれから採らねばならない。

2. 生活の場所から見れば

学校の生活	家庭生活	
学校以外の生活	郊外生活	の種々の場面がある。
	社会生活	

3. 生活の対象より見たる種別

郷土の自然乃至自然現象

郷土の文化の構造姿態

郷土の人事現象

郷土の歴史的年中行事

国民的年中行事

社会協同自治の生活様式⁷¹⁾

生活科教育の材料の選択の標準について、同書は次のように述べている。

1. 各教科に於て充分指導し得ざるもの

即(1)其内容が何れの教科にも属さざるもの、分科以前の生活

(2)各教科に於て其の生活の或部面は指導し得る

も、全体統合の形生活、そのままの姿に於ては各分科に於ては指導し得ざるもの

2. 児童生活に即せるもの
3. 正当に社会観を与ふるもの
4. 少数の基本的代表的のもの

材料配列の標準については、次のように述べている。

1. 各教科共通の一般的標準に拠る

即(1)題材相互間の論理的関係を追ひ易より難に進むこと

- (2)児童の心理的要求に従ふ

- (3)論理的配列と心理的配列とを程よく調和せしむること

(4)季節に関係あるものは之に合はせしむること

2. 生活科題材として特に配列上留意したる点

- (1)生活の対人関係より考察して大凡左の順序を追ふて低学年より高学年に配列した。

個人生活→→家庭生活→社会生活

- (2)児童生活指導上特に必要有効と認むる題材は、之を毎学年若くは二三ケ学年連続配列した

- (3)身体的労働を要するもの程高学年に配列した。

同書は、教材の選択と配列の標準を以上のように述べて、表1のような各学年教材一覧表を示している。

三	二	一	三	二	十	九	七	六	五	四	月	学
ひなまつり	自松雪 然葉遊 散遊 策びび	まおりも 遊ち びや	乗繪 物本	花どん木 屋んぐりの 遊び遊葉	多おお 賀べんさ 様詣でうま	川お 遊 び盆	し砂七 や遊ん 玉び夕	土菌の 遊掃 び除	おずば 節な抜 句き	つつく みし取 り花	1	学
ひなまつり	入雑 浴誌	犬竹は ねつ 馬き	お猫 客遊 び	毯こま つき遊び (女男)	砂お 糖タ と塩飯	のお み 水盆	水七 遊 び夕	雨お 掃 除	おつ 節み 句花	自多 然賀 散様 策詣で	2	学
ひなまつり	紙と鉛 筆	多賀 様詣で	た き 火	魚搾 市乳 場所	買多 賀様 秋祭 物祭	間お 食盆	水七 遊 び夕	貯停 車 金場	自お 然節 散句 策句	多つ 賀様 み春 祭草	3	学
ひなまつり	履直方 町めぐり 物り	軍お 正 人月	針火理 科供 養事養	入茸学 習 浴狩園	月多 賀様 秋祭 会祭	自蟬お 然取 散策り 盆	夏七夕 の遊 び夕立	小梅ほ たる 飼雨狩	停お 車節 場句	多つ 賀様 み春 祭草	4	学
ひなまつり	着時直 方機関 庫	日燈 記 帳火	郵便科 供供 局養養	選家ちて 日の出橋に立	多公月 賀様 秋市 祭場会	お模 型飛 行除機 盆	夏七水 季聚 落夕泳	自台直 方交 散策所 通		工つ多直 賀様春祭 みみ町廻 場草祭り	5	学
ひなまつり	町直方 役の交 場通	営ラ入 屠装置 牛寒具と 所暖房	工義 士 場会	警選 察 署挙	多月 賀神見 社秋祭 会	学新お 校聞盆	多水七 賀様 詣で泳 夕	活魚図 動釣書 写真館	おちて 日の出橋に 立	直つ多直 方区裁判 所春祭 祭策	6	学

生活科指導題目各学年一覧表

教育要目の例と学習指導案例をあげてみよう。 習指導をあげてみる。(原文はたて書き)
 ここでは、¹⁰²2年生の10月の「お夕飯」の要目と学

学期 月週	題 目 目 的 要 項	準備 時間連絡 配当	指 導 上 の 注 意
第 二 学 期 十 月 (七・八週)	一. 題目お夕飯 二. 目的 1. お夕飯を中心として家庭団樂の気分を味はしむる。 2. 自らなる長幼の序と相互敬愛の家族精神を培養する。 3. 夕飯に対する心得(主として徳性方面)を知らしめて反省を促す。 三. 指導要項 1. 實際経験の各場合。 (1) 家内中皆揃った時の夕飯 (2) 父若しくは母不在の時の夕飯 (3) 空腹を覚ゆる時の夕飯 (4) 比較的空腹ならざる時 (5) 副食物の嫌ひな時 (6) 副食物の好きな時 (7) 家庭に病人ある時 (8) 自己が病氣の時 (9) 家庭の不和の時 (10) 自己が不満の時 (11) 其他 2. 各場合の心情考察と自覚 3. 夕飯時の表現による回想の正否と表現の巧拙	四. 準備 1. 夕飯に関する方便物の蒐集 2. 直方地方に於ける実情の調査 3. 経験事項の整理 五. 時間配当 (特設時間 二 課外 凡一 第一次 { 家庭 自由研究 課外 凡一時間 第二次 { 室内 共同研究 特設時間一時間 第三次 { 室内共同研究及 表現整理 特設時間一時間 六. 連絡事項 1. 修巻一七たべ物に氣をつけよ 2. 修巻一、八行儀よくせよ 3. 修巻一、九物を粗末にするな 4. 修巻二、十一不作法な事をするな 5. 修巻三第十一 行儀	七. 指導上の注意 1. 夕飯は三度の食事中一番楽しいものであらう、さればこの氣分を充分味はしめて家族精神の培養に資せねばならぬ。 2. 本題材はあまり修身的な衛生的な取扱に偏しやすい傾向にある教材である、さればこの点充分注意してかくの如き態度にならぬやうにせねばならぬ。 3. 本材料は児童の個性なり家庭の實状なりを察知するには最もよい題材であるから指導者はこの際かくの如き方面を察知して教育の参考に資せねばならぬ。

この学習指導案の冒頭に「日常生活の反省より家族精神の体得を図る」とあるように、また、「要目」の目的の項で、「1. お夕飯を中心として家庭団樂の気分を味はしむ、2. 自らなる長幼の序と相互敬愛の家族精神を培養する。3. 夕飯に対する心得(主として徳性方面)を知らしめて反省を促す」とあるように、生活科は、たしかに、生活指導を目的としたものであることがわかる。各題材の目的を検討してみると、第二次大戦後の社会科を思わしむるものがある。そのような例をいくつかあげてみよう。
 六年生「工場」

1. 直方町にある工場の代表的なもの数種(石けん工場、硝子工場、製氷工場、タオル工場、鉄工所)の実際を見学せしめて工場気分を味得させる
2. 工場内の活動を通して人力の機械化作業の分業化に就いて理解させる

3. 労資の協調、社会人としての個人の使命を感じ得させる¹⁰³

五年生「選挙」

1. 選挙の意義を知らせ公民としての人権素地を養成する
2. 各種宣伝を通して緊張した選挙気分を味得させ社会の実相を理解させる
3. 労組選挙に対する自覚を促し良心の啓発をはかる¹⁰⁴

五年生「直方町の郵便局」

1. 郵便局見学により直方町郵便局の郵便事務の概要を了解せしむ
2. 歴史的に見たる郵便事務について概念に与へると同時に現代文化の恩澤に感謝せしむ¹⁰⁵

四年生「直方町廻り」

1. 直方町市街部の観察をなし郷土を理解せしむ
2. 町の地理的、¹⁰⁶歴史的発展を考察し兼ねて愛町の念を養成する

指導案例 一

日常生活の反省より
家族精神の体得を図る

生活科学習指導案

第二学年二之組 氏 名

一. 題 目 お 夕 飯

二. 私の本学習資料観及指導態度

1. お夕飯は恐らく何れの家庭も一家団欒の好機会でせう、一日の劇務を終へて帰つた父、終日遊び疲れて堪へ難き空腹を抱へた子供等が母の心のこもつた膳部に箸を揃へて向ふその情景、子供等は一日の楽しみを語り、母は留守中の重なる出来事を話す、更に語りひは明日の活動へと進展する、その和気あいあいたる気分は家庭にのみ見る生活事実ではあるまいか、私はこの気分を充分味はしめたいと思ふのであります。
2. ところが一年中このやうな楽しい、平和なお夕飯ばかりではありますまい、時には苦い顔をして砂を咬むやうな不愉快な夕飯になるやうな事がありませう、病人を抱へて憂の中に終る事もありませうし、更に涙の中に過すこともありませう、尚自分が病気等の場合は勿論です、又それ程までではなくとも父や母の不在などのために淋しいこともありませう、何れにしてもこういふことの多いのは喜ぶべき現象ではありません、さればこういふことの因て来るべきものを明にして、児童相應の自覚を促すことは決して徒らな事ではなからうと思ふのであります。
3. 夕飯等の場合は何れの家庭でも同じやうに席次などがはつきりきまつてゐて、そこにはつきりと長幼の序が示されてゐます、父から長男、次男と長女から次女へと……権利義務を超越した血族団体の自由の中にも侵すべからざるものがあることを知らせたい、そして愛あり秩序あり相互敬愛の家族精神を知らしめたいと思ひます。
4. お夕飯に就いては色々の美風があります、最初に神仏に飯を供へた後に家族のもの、それも先づ年長者からといふやうなこと、尚留守の者には影膳を作るとか数へ来れば多くありませう、こういふ事を出来るだけ取扱つて純情の啓培に資したいと思つてゐます。
5. 以上のやうなことはすべて児童の経験事項を基として学習せしめたい、そして心得などを真向から打込むことなく暗示的に批判的に指導したいと思つてゐます。

三. 目的

1. お夕飯を中心として家庭団欒の気分を味はしめる。
2. 自らなる長幼の序と相互敬愛の家族精神を培養する。
3. 夕飯に対する心得（主として徳性方面）を知らしめて反省を促す。

四. 学習活動の推定と時間配当 特設時間 二 課外 一

- | | |
|-----|-----------|
| 第一次 | { 家庭 自由学習 |
| | { 課外 凡一時間 |
| 第二次 | { 室内 個人学習 |
| | { 特設時間一時間 |
| 第三次 | { 室内 共同学習 |
| | { 特設時間一時間 |

五. 準備

1. 夕飯に関する方便物（絵画、文章、其他）の蒐集……教
2. 経験事項の回想、整理……児

六. 連絡事項

1. 修尋一 七、たべものに気をつけよ。
八、行儀よくせよ。
九、物を粗末にするな。
 2. 修尋二 十一、不作法なことをするな。
 3. 修尋三 十一、行儀。
- 月 日 曜日 第 時限

一. 題 目 お夕飯

二. 主 眼 共同学習により第二次分の目的達成を図る

三. 学習活動の推定と指導豫定

1. 目的指示
2. 経験事項の発表と相互研究
批判 反省
3. 整理

理科的要素をもった目的をもつ題材もある。

一年生「摘花（主として草花）」

1. 摘花を実演せしむることによって美しき自然に接せしめて美感を養ふ
2. 花を摘むことによって花の（普通一般的に眼に留る程度）種類を知らせる。
3. 花を観察せしむることによって花に対する理科的初歩の知識の啓発をはかる⁹⁸

第四学年「螢狩り」

1. 螢狩りを実演せしめて愉悅の情趣を味得せしむ
2. 初夏田園の純朴なる夜の情景を玩味せしめ高雅なる心情を啓培す
3. 理科的研究の趣味性を蒸起し科学生活の基礎を養ふ
4. 螢籠を製作せしめて工夫創作力を養ふ⁹⁹

『教育要目』の中の指導要項を手がかりに、指導の方法を検討してみよう。

『教育要目』の中の指導要項でうかがわれる指導の方法は次のようなものである。

- ・実演
- ・実演後の整理
- ・実演後の表現
- ・実演後の感想整理
- ・実演方法の研究
- ・実演に対する疑問
- ・見学
- ・実習（用具の）
- ・計画
- ・作製
- ・観察
- ・考察
- ・創作
- ・種類調査
- ・概観
- ・蒐収
- ・経験事項の発表
- ・回想発表
- ・遊びの実演
- ・説明
- ・立案と其の適否の探究
- ・自由発表——絵
- ・自由発表——お話
- ・批判鑑賞

これらの方法を検討してみると、実演を中心に方法が多彩であるといわなければならない。

なお、この生活科は「教育要目」によれば、教科外の「特設自由時間」において行なわれたものである。『要目』は、次のように記述している。「指導時間は全部課外に之を採った。然し本材は毎日一時間の特設自由学習時間があるからそれより毎週一時間乃至二時間を本科指導に充てた。

なお放課後校外又は家庭に於ける学習作業は時間を一定し難いから凡の文字を冠して配当時数を記入し指導者の参考とすることにした。⁹⁹」

『教育要目』で検討してみると、ほとんどの題材が、特設時間と、放課後の校外又は家庭において行なわれている。たとえば、「つくし狩り」は、特設時間1、課外凡2、「摘花」は、特設時間2、課外1、というふうなのである。

特設時間だけで行なわれるものも若干ある。

7. 直方北小学校の「生活科」の特質

以上のことから、直方北小学校の「生活科」の特質として、次のことがいえると思われる。

- (1)それは、教科内容とかかわらない児童生活そのものを、生活指導の必要から設置したものである。
- (2)それは、毎日一時間ある「特設自由時間」のうち毎週一時間乃至二時間と放課後、課外又は家庭において行なった。
- (3)他教科の準備ではなく、生活指導を目的とするところから、一年から六年まで行なわれていた。
- (4)題材とそれに含まれている目的を検討してみると、理科的要素をもったものもあるし、戦後の社会科を思わしむるものもある。
- (5)指導の方法は、実演を中心としたものが多いが、見学、調査、発表、創作、立案、考察と多彩である。体験的活動や自発的活動、個性を尊重するところは、現在の生活科の場合とよく似ている。

直方北小学校の生活科は、単元という概念をつかっていないが、その内容は、明らかに、単元学習の性格をもっている。そこで、直方北小学校の生活科を、単元の性格から考察すると、それは、教科内容とかかわらない児童生活を対象とする点で、明らかに、経験単元に属する。その題材や題材に含まれる目的の中に戦後の社会科と共通のものが含まれていることについては当時の生活指導が、そのような知識や態度をもった「公民」を育てることを必要としており、当時の国史、地理では教えられないそのような内容を昭和4年の時点で、直方北小学校はその「生活科」において、既に部分的に用意していたとみることができる。

引用文献

- (1) 拙稿「教材単元と経験単元の問題(1)」 福岡教育大学紀要 第41号 第4分冊 1992
- (2) たとえば、戦後、広島大学教育学部付属小学校などで実践されている。平田嘉三「生活科教育を考える」平田嘉三他『子どもらと共に歩む生活科教育を考える』 三見書房 1987, 188—222. 袴口俊『『合科的』指導の試み』『第3期実践記録集成——教育課程・総合学習』 学校教育刊行会 1982, 114—117ページ
- (3) 直方北尋常小学校編『生活科教育要目』 直方北尋常小学校 昭和4年5月16日発行。直方北尋常小学校編『特設教科としての生活科』 直方北尋常小学校 昭和4年6月16日発行。上記二書は、福岡教育大学付属図書館所蔵の保存図書である。直方北小学校の生活科について言及されたのは、平成2年7月17日に行なわれた第5回福岡教育大学教育工学センター授業研究会における谷口雅子「日本における生活教育の歴史」のレジメが最初ではないかと思う。直方北小学校の「生活科」の当時の生活教育の中の位置づけについては、氏の検討を待ちたいと思う。
- (4) 『特設教科としての生活科』 1—2ページ
- (5) 同上書 3—4ページ
- (6) 同上書 4ページ
- (7) 同上書 5ページ
- (8) 同上書 6ページ
- (9) 同上書 7—9ページ
- (10) 同上書 14—15ページ
- (11) 同上書 15ページ
- (12) 同上書 17—18ページ
- (13) 同上書 18—19ページ
- (14) 同上書 19ページ
- (15) 同上
- (16) 同上書 22ページ
- (17) 同上書 24—25ページ
- (18) 同上書 28ページ
- (19) 同上書 30—31ページ
- (20) 同上書 31ページ
- (21) 同上書 33—34ページ
- (22) 同上書 34ページ
- (23) 同上書 35ページ
- (24) 同上書 36ページ
- (25) 同上
- (26) 同上
- (27) 同上書 40—41ページ
- (28) 同上書 41—43ページ
- (29) 同上書 43—44ページ
- (30) 同上書 45—46ページ
- (31) 『生活科教育要目』 26—27ページ
- (32) 『特設教科としての生活科』 62—66ページ
- (33) 『教育要目』
- (34) 同上書
- (35) 同上書
- (36) 同上書
- (37) 同上書
- (38) 同上書
- (39) 同上書